

## 渡米した房総アワビ漁師の古文書調査

南房総市 鈴木 政和

私たちは、明治期に南房総から渡米したアワビ漁師たちの歴史文化について調査研究を進めています。2005年にNPO法人安房文化遺産フォーラムが「ウミホテルとアワビが結ぶ日米交流」を開催して以来、カリフォルニア州モントレイ湾域の人びとと15年にわたり交流しています。

アワビ移民のリーダーは、長尾村根本(南房総市白浜町)出身の小谷源之助・仲治郎兄弟です。ヘルメット型の器械式潜水具を導入し、寒流の海でアワビ漁を行いました。兄の源之助は米国に留まり、缶詰工場などのアワビ事業に成功しましたが、日米開戦後は強制収容所に移送され、移民の歴史は幕を閉じました。しかし戦後50年を経て、彼らの功績は米国で顕彰され、かつて住んでいた土地は「コダニ・ビレッジ」と公式に命名されています。

一方、弟の小谷仲治郎は帰国し、七浦村千田(南房総市千倉町)に住み、同じ集落の人びとを中心に潜水士を養成して、アメリカに送り込みました。さらに水産界のみならず様々な産業や教育・文化にいたるまで、安房地域の発展に

幅広く関わっていました。兄に比べるとあまり知られていませんが、私たちは仲治郎の活躍に注目していました。

近年、仲治郎の旧宅を解体することとなり、私たちは遺族から管理を任せられました。許可を得て、屋内の資料等を調査したところ、8枚の襖から下張りとして使われていた大量の古文書を発見しました。旧宅は大正期に建てられており、見つかった古文書は、実家の水産問屋・金澤屋に関わる勘定書類や、家族・友人らと交わした書簡、七浦尋常小学校に関わるものなど、ほとんどが明治期の資料でした。当時不要となった紙類を襖の下地に再利用したために、古文書は千切られた断片になっていますが、貴重な歴史資料の大発見となりました。

令和元年度より南房総市の市民提案型まちづくりチャレンジ事業に採択され、「房総アワビ移民研究所」として古文書の調査研究に取り組んできました。大量の資料を紙質や筆跡別に分類し、封筒に仕分けして目録を作成する作業を進めていた矢先、台風15号の直撃により、資料を保管していた建物は全壊してしまいました。私たちは、散乱し水没した資料を1枚ずつ拾い集め、「千葉歴史・自然資料救済ネットワーク」の専門家の指導を受けて、冷凍・圧縮・乾燥の手順を繰り返して原状回復し、半年かけて古文書レスキューに成功しました。

今年度は、さらに4枚の襖から新たに古文書を取り出して分類しています。研究チームは、くずし字の解説と専門家の添削の後に、データ入力・目録作成と作業を進めています。今のところ170枚ほどが完了しましたが、まだまだ半分以上残っています。

教育熱心な小谷家では、明治初中期の段階で、兄の源之助は慶応義塾幼稚舎に、弟の仲治郎は水産伝習所に就学させています。兄弟の父である金澤屋当主・小谷清三郎と母たよは、多くの書簡をやり取りしています。夫婦で水産業に取り組んでいた姿や、子供たちの教育に対する考え方を見ることができます。

根本の金澤屋に関わる書簡から、布良にも支店があったことや、新潟の佐渡や秋田の能代などに向いて漁業をしていたこと、とくに対清国への乾鮑貿易に関わる製造指導のやり取りなど、これまで知られていなかった安房の水産業者の姿が明らかになっています。また、水産伝習所（現・東京海洋大学）の卒業生や農商務省関係者との交流をはじめ、金澤屋と水産加工業・貿易関係者との商取引の書簡は、明治期の殖産興業を考えるうえで重要な内容を伝えるものといえます。

また、小谷兄弟の妹・ひでは、画家の倉田白羊に嫁いでいます。倉田は安房を中心として、全国的に児童自由画教育

を広め、後に信州上田の農民美術学校の副校長になった人物です。布良で『海の幸』を描いた青木繁が亡くなったときには、美術文芸誌『方寸』の青木繁追悼号を夫婦で編集しています。多様な美術ネットワークを有しており、今回の古文書からもその一端が見えてきます。

### 調査研究は、解読チ

ーム・入力チームのボランティアによって進められています。

けれど、資料は膨大な量があり、とても手が足りません。埋もれた地域の歴史に光を当て、日米交流に貢献するため、お手伝いしてくださる方を募集しています。簡単なパソコン入力だけでも助かります。どうぞよろしくお願いします！

